10　関東で威を振るうの討伐を命じられたは一計を案じて、将門に取り入り、その館に滞在している。そこで小宰相と恋仲になっている。文章を読んで問いに答えよ。　　　　　　　　〈東北大〉二〇二二年度出題

　さるほどに、平親王将門、常にこの女房のよそほひ御覧じて、御心に染みておぼしければ、時々はこのへ通はせふが、折節親王この局におはしける時、秀郷参り合うたり。怪しく思うて、物のよりひ見れば、同じ男体の束帯にて、七人ひとしく座し給ふ。こは不思議のことかなと思うて、その夜は帰りけり。明けの夜また御局へ参りて、様々にまじきことども言ひ交はして後、藤太「さても過ぎし夜、この御局に人音のしけるを、人やらんとさし寄りて物のより見てあれば、さしも気高き上﨟のおはしましてふは誰人やらん」と問はれければ、小宰相「（ア）それこそ将門の君にておはしませ。見まがひ給ふにや」とのたまへば、藤太重ねて申すやう、「殿ならば、ただ御一人こそおはすべけれ。同じの上﨟七人まみえおはしつるこそ不思議なれ」と申す時に、小宰相「さてはいまだ知ろしめさずや。殿は世の常にえ、御かたちは一人なれども、御影の六体まします故に、人目には七人に見え給ふなり」。藤太奇異の思ひをなし、「さて御本体には御見知りの候ふや」と問はれて、女房「人に語らぬことなれども、御身なれば申すなり。うはの空におぼしめし、他人に漏らし給ふなよ。かの将門は御かたち七人にて、御振舞変ることなしといへども、本体には、日にふ、に向ふ時、御影うつり給ふ。六体には影なし。さてまた御身体くなりといへども、御耳のそばにこめかみといふ所こそ肉身なり」と語らせ給へば、藤太よくよく聞きて、「あつぱれ、（イ）大事をも聞きつるものかな。これこそ誠にわが生国の大明神御託宣にてあるべし」と、いと有難くて、そなたの方に向かつて祈念のをしたりけり。

　さてはこのたび、将門をただ一矢に射伏せんことは、案の内と思ひとり、その後は夜な夜な、かの御局へ参るには、ひそかに弓と矢をばさみ、忍び窺ひけり。案のごとく、また将門かの御局へ入らせ給うて、うちとけて御物語などし給へり。藤太、物の隙よりよくよく見れば、げにも六人には、灯火にうつる影もなし。本体には影のありと言ふについて、目を澄まし見れば、時々かのこめかみといふ所動きけり。藤太、（ウ）あつぱれ幸ひかなと、弓と矢をうちひ、ひやうど射たりけり。もとより秀郷はの手だれ、が百歩の芸にも超えたる上、は間近し。何かはもつて射損ずべき。小耳の根と思ふ所をへづんど射通しければ、さしもにき将門も、のつけに倒れてしくなれば、残る六人のかたちも電光石火のごとくにて、光と共にせにけり。

　さるほどに将門滅びぬれば、、秀郷は喜びの眉を開き、討ち取るところの首、ならびにどもを召し連れ、ざざめかいて上らるる威勢のほどこそ⑴ゆゆしけれ。道遠ければ、王城へは誠のはいまだ聞えず。官軍はにはうち負け、将門はすでに帝都へ攻め入るなどと聞えければ、大きに驚かせ給ひつつ、諸寺諸山に勅使立て、調伏の法をしきりに行ふべき由、宣下せらるる。中にも八坂の浄蔵貴所は「今度将門が攻め上るといふことは、全くもつてなるべし。もしさなくは⑵いたづらごとなるべし。ただしかの首の上り候ふにや」と勅答申されけるが、果して四月二十五日、貞盛、秀郷の両人、将門の首を持ちてせられけり。これによつて、（エ）君も御物思ひを休められ、臣も喜び勇みつつ、一天四海のの思ひをなしたりけり。

（『俵藤太物語』による）

（注）　○この女房――小宰相のこと。

　　　　○上﨟――身分の高貴な人。

　　　　○帯佩――容貌・服装などの様子。

　　　　○わが生国の大明神――近江国の大明神のこと。

　　　　○養由が百歩の芸――中国の国の弓の名人養由基が、百歩離れて柳の葉を射たところ百発百中であったということ。

　　　　○貞盛――平貞盛。貞盛も将門討伐を命じられていた。

　　　　○ざざめかいて――騒ぎたてて。

　　　　○主上――天皇。

　　　　○八坂の浄蔵貴所――京都八坂寺の僧。「貴所」は尊称。

問１　傍線の箇所⑴⑵の語の意味を記せ。

問２　傍線の箇所(ア)「それこそ将門の君にておはしませ。見まがひ給ふにや」を口語訳せよ。

問３　傍線の箇所(イ)に「大事をも聞きつるものかな」とあるが、この「大事」とはどのようなことか。四十字以内で説明せよ。

問４　傍線の箇所(ウ)に「あつぱれ幸ひかな」とあるが、なぜこのように思ったのか。四十字以内で説明せよ。

◎問５　傍線の箇所(エ)に「君も御物思ひを休められ」とあるが、なぜこのような気持ちになったのか。五十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝並々でない

「並々でなく素晴らしい」も可。

　　　⑵＝役に立たないこと

「むだなこと」「何のかいもないこと」も可。

問２　その人はＡ将門の君でいらっしゃる。Ｂ見間違いなさったのだろうか

Ａ＝５〔尊敬表現がないものは０。〕

Ｂ＝５〔尊敬表現がないものは０。文末が疑問でないものは減点３。〕

問３　将門はＡ七人に見えるが、Ｂ本体にだけ影があり、Ｃそのこめかみだけが生身であること。（38字）

将門についての説明でなければ全体０。

Ａ＝４

Ｂ＝３〔「本体以外の六体には影がなく」も可。〕

Ｃ＝３〔同意表現可。〕

問４　将門のＡ本体がわかり、そのＢこめかみを至近距離から一矢で射抜けそうだから。（35字）

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４

Ｂ＝６〔「至近距離」「一矢」がないものは各減点２。〕

問５　Ａ貞盛と秀郷が将門の首を持って上洛したことで、Ｂ将門討伐を確認し、Ｃ都の平安が守られてＤ安心したから。（47字）

Ａがなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝２〔「報告を受け・知り」といった同意表現可。〕

Ｃ＝２〔都についての説明でなければ０。〕

Ｄ＝３〔「安堵した・ほっとした」といった同意表現可。〕

【現代語訳】

さて、平親王将門は、常にこの（小宰相という）女房の姿をご覧になって、すっかり気に入りなさったので、時々彼女のお部屋へお通いになるが、ちょうど親王がこの部屋にいらっしゃったとき、秀郷が参上して出くわした。（秀郷は）不審に思って、物の隙間からこっそりいて見ると、同じ男姿の（身分の）高貴な人が正装で、（その）七人が全く同じ形で座っていらっしゃる。（秀郷は）これは不思議なことだなあと思って、その夜は帰った。明くる夜またお部屋へ参上して、（小宰相と）さまざまに親密な言葉をあれこれ言い交わしてから、藤太（秀郷）が「それにしてもこの前の夜、このお部屋で人の声がしたので、何者だろうかと近づいて物の隙間から見てみると、いかにも気高い（身分の）高貴な人がいらっしゃいますのは何者だろうか」とお尋ねになったところ、小宰相は「問２その人は将門の君でいらっしゃる。見間違いなさったのだろうか」とおっしゃるので、藤太がさらに申し上げることは、「（将門）殿であるならば、たったお一人でいらっしゃるはずだ。同じ容貌・服装（などの様子）の身分の高貴な人七人がお顔を合わせていらっしゃったのは不思議だ」と申し上げるときに、小宰相は「それでは（あなたは）まだご存じではないのか。殿は普通の人を超越していて、お姿は一人であるけれども、御影が六体いらっしゃるので、他人の目には七人にお見えになるのだ」（と言った）。藤太は奇妙な思いになり、「それで御本体にはお見分けのつく所がございますか」とお尋ねになって、女房（＝小宰相）は「夢でも現実でも（けっして）他人に話さないことであるが、あなた様だから申し上げるのだ。たいしたことではないと思いなさって、他人に漏らしなさるなよ。あの将門はお姿が七人で、おふるまいも変わることがないけれども、本体は、太陽に向かったり、灯火に向かったりするとき、御影が映りなさる。（ほかの）六体には影がない。そこでまたお体がすべて黄金であるというけれども、お耳のそばにこめかみという所（があり、それ）が生身である」と語りなさるので、藤太は十分に聞いて、「ああ、（秘密の）大事をすっかり聞いてしまったぞ。これこそ本当に私の生国である近江国の新羅大明神のお告げであるに違いない」と、とてもありがたく（思っ）て、そちらの方角に向かって祈念する様子を見せた。

　そしてこの度、将門をたった一矢で射倒すことは、思いのままだと決意し、その後は毎夜毎夜、あのお部屋へ参上する際には、こっそりと弓と矢を脇にはさみ、隠れてこっそり覗き見た。思ったとおり、また将門はあのお部屋へお入りになって、うちとけて会話などをなさっていた。藤太が、物の隙間から念入りに見ると、本当に六人には、灯火に映る影もない。本体には影があると言うのに従って、（影のある者を）目をこらして見ると、時々あのこめかみという所が動いた。藤太は、ああ運がよいものだなあと、弓に矢をつがえて、ひょうっと（勢いよく）射た。もともと秀郷は弓を射る力が強い熟練者で、中国楚の国の弓の名人養由基が、百歩離れて柳の葉を射たところ百発百中であったという芸も超えている上に、的との距離は短い。どうして射損じようか、いや射損じるはずはない。耳の付け根と思う所をあちらへずんと射通したので、あれほど勇ましい将門も、あおむけに倒れて死んでしまうので、残る六人の姿もあっというまに、光と共に消えてしまった。

　さて将門が滅びたので、平貞盛と、秀郷は喜びほっとして、討ち取った首と、合わせて捕虜たちを連行しなさり、騒ぎたてて上洛しなさる威勢の様子は問１⑴並々でな（く素晴らし）い。（都への）道のりが遠いので、内裏へは事の真相の子細はまだ伝わっていない。（反対に）官軍は戦いには負け、将門はいまや都へ攻め入ってくるなどとうわさになっていたので、天皇は大いに驚きなさるままに、あらゆる寺院に勅使を立てて、（将門）調伏のを絶え間なく行いなさいという旨を、命じなさる。中でも京都八坂寺の御僧は「この度将門が攻め上るということは、全くもって噓であるはずだ。もしそうでなければ（＝将門が攻め上るということが本当ならば）仏のご利益は問１⑵役に立たないことであろう（が、そんなことは考えられない）。もしかすると（将門自身が攻め上るために上洛するのではなく）あの（将門の討ち取られた）首が上洛するのでしょうか」と天皇に答え申し上げなさったが、果たして四月二十五日、貞盛、秀郷の二人が、将門の首を持って上洛しなさった。これによって、天皇もご心配がなくなって安心なさり、臣下もそれぞれに喜び勇み、天下の人民は皆安堵した。